

CAPS Newsletter

The Center for Asian and Pacific Studies, Seikei University

No.118 April, 2013

目次

〈新年度のあいさつ〉

CAPS 所長(経済学部教授) 中神 康博 ... 1

〈アジア太平洋研究センター(CAPS)からのお知らせ〉..... 2

〈報告・CAPS主催連続講演会

「統合と分裂の力学から見るアメリカ—過去・現在・未来」

第5回講演・野崎与志子氏

「ジェンダー・ダイナミクスとアメリカ社会
—政治と経済と高等教育」

法科大学院教授 武田 真一郎..... 4

〈センター叢書紹介〉

大熊昭信・庄司宏子編

『グローバル化の中のポストコロニアリズム』(風間書房)

文学部特別任用教授 大熊 昭信.....5

〈シリーズ・若者たちのアジア太平洋世界(第14回)〉

健やかなるコミュニケーションのために

国際教育センター常勤講師 石井 友子.....6

〈寄稿〉

沖縄・ソウルのアーカイブスを訪ねて

CAPS 客員研究員 高一..... 7

〈2012年度新規プロジェクトの紹介(第4回)〉

日韓比較メディア研究—情報と文化の位相

文学部特別任用教授 奥野 昌宏..... 8

〈2013年度 研究プロジェクト一覧〉.....9

〈寄稿〉

トクヴィルとカナダ

—古きよき「フランス」の発見とそのジレンマ

CAPS 主任研究員 愛甲 雄一.....9

〈シリーズ・本を読む〉

武田尚子『チョコレートの世界史—近代ヨーロッパが

磨き上げた褐色の宝石』(中央公論新社、2010年)

CAPS 所員(経済学部教授) 吉田 由寛.... 13

〈アジア太平洋研究センター(CAPS)活動報告〉..... 14

新年度のあいさつ

CAPS 所長 (経済学部教授) 中神 康博

2010年4月にアジア太平洋研究センター所長に就いてから4度目の春を迎えました。ことしは関東でも厳しい寒さが続きましたが、そのせいでしょうか、例年になく早い桜の開花となりました。満開というわけにはいきませんが、卒業式と入学式で桜を楽しむことができたのは久方ぶりだったのではないのでしょうか。残任期間を1年残して学長になられた亀嶋庸一法学部教授から「所長室からの花見は格別ですよ」と伺ったのを覚えておりますが、年度末から年度始めのこの時期、わたくしのせわしない性格からか、ことしも所長室から桜の花をゆっくり愛でるという機会を逃してしまったようです。その所長室は、所長に就任して以来、所員会議や運営会議だけではなく、センター主催の講演会などにお越しいただいた先生方の懇親会の場としても利用されています。熱弁をふるわれた後にスタッフや関係者と談笑するなかでちょっぴり安堵された先生方がお見えになる人間性に触れることができるので、所長室での懇親会もセンタースタッフにとってとても楽しみな行事のひとつになっています。

この3年間、センター設立30周年と成蹊学園創立100周年の記念行事が続いたこともあり、あっという間に時間が流れたように思います。2010年度から2年間にわたって「人間の安全保障と東北アジア」というタイトルで連続講演会を行い、多くの先生方に講演に来ていただきました。また、2011年度にそれと並行するかたちで「東アジアの

歴史と思想」、「デモクラシーとコミュニティ」というテーマのシンポジウムをそれぞれ開催し、おかげさまで大学関係者だけではなく多く的一般の方々にもご参加いただきました。センタースタッフは、この一連の記念行事を是非本というかたちで残したいと考え、参加いただいた講演者の方々を中心に論文の執筆をお願いし、初夏には「デモクラシーとコミュニティ—東北アジアの未来を考える(仮題)」というタイトルで出版にこぎつけたいと準備を進めているところです。

記念行事がひと段落した後、日本を含め露、仏、米、中国、韓国などで国のトップを決める大事なイベントが続いたこともあり、昨年度センターでは世界の政治経済を牽引してきたアメリカ国家の光と影に着目して「統合と分裂の力学から見るアメリカ—過去・現在・未来」というタイトルで連続講演会を開催しました。今年度もセンタースタッフとともに新たな連続講演会の企画の準備を



進めているところです。また、昨年度末に4つの共同プロジェクトが終了しましたが、さっそくそのひとつ「通文化主義の可能性研究」プロジェクト（リーダー：大熊昭信文学部特任教授）から『グローバル化の中のポストコロニアリズム—環太平洋諸国の英語文学と日本語文学の可能性』が刊行しました。ご高覧いただければ幸いです。

センターはアジア太平洋地域を中心とする研究あるいは研究助成の拠点として学園や大学にとって特異な存在です。労働環境が目まぐるしく変わるなかで、持続可能な組織を作っていく

ことは並大抵のことではないと感じています。これまでの3年間所長としてこの組織に関わっていくなかで、大学だけではなく多くの一般の方々からも絶大なるサポートをいただいていることを肌で感じてきました。センターが今後も益々の発展を遂げることができるよう任期最後となるこの1年間、持続可能な組織づくりを目指して少しでもお役に立つことができると考えております。この1年間、これまでと同様に皆様のご支援とご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

アジア太平洋研究センター (CAPS) からのお知らせ

2013年度のCAPS企画

2012年度のアジア太平洋研究センター (CAPS) ではセンター主催の連続企画として「統合と分裂の力学から見るアメリカ—過去・現在・未来」と題した連続講演会 (全5回)、ならびに連続映画鑑賞会「映画を通じて知るアジア太平洋の世界」(全5回) を開催致しました。そこで2013年度も引き続き、同様の連続講演会と連続映画鑑賞会を軸にしながら、その他さまざまな講演会や研究会、シンポジウムなどの主催・共催を通じて、アジア太平洋地域のさらなる理解・研究に資する場を提供し

て参ります。センターが開催するこれらの公開企画は、いずれも入場料を頂戴することはいたしません。また参加資格についても、成蹊大学・学園関係者はもとよりその他すべての方々に対し、門戸を開いております。ご興味のおありの方は、どうかふるってご参加ください。

今年度の連続講演会ならびに連続映画鑑賞会は、以下のような企画内容での開催を予定しております。

連続講演会「再考・戦後アジアにおける戦争

—それは私たちに何を教えているのか(仮題)」(全5回)

未曾有の惨禍をもたらしたアジア・太平洋戦争が敗戦という形で67年前に終結してから、その後直接的な戦火に日本は一度も巻き込まれることなく、その平和と繁栄とを謳歌してきました。それは、厳しい冷戦対立や核の傘、巨大な米軍基地の存在といった矛盾を抱えながらも、歴史上稀に見るよき時代として、日本国民に多くの幸福と利益とをもたらしてきたのです。ところが、昨今の東アジア情勢ならびに日本国内の雰囲気は、こうした状況にも変化が訪れかねないことを示唆しています。憲法9条の改正が現実味をもって語られ、それを支持する国会議員が多数を占める事態は、その是非はともかく、まさにこれまでの「平和な

時代」が大きな転機を迎えていることの証左と言えましょう。

そこで今年度のアジア太平洋研究センター (CAPS) では、戦後日本の周辺で起きたアジア地域の諸戦争を今一度振り返ることによって、既に多くの日本国民にとって未知のものとなっている戦争について考える連続講演会「再考・戦後アジアにおける戦争—それは私たちに何を教えているのか(仮題)」を開催するつもりでおります。そのねらいは、個々人の政治的立場はひとまず脇において、現代の戦争とはいったい何か、戦後アジアの諸戦争は当該国のみならずアジアや日本にいかなる影響・遺産をもたらしたのか、それは現在に生きる私たちに対していったい何を教えているのかなどについて、学術的な見地から検証していこう、という点にあります。その具体的な日程・テーマなどは現時点ではまだ未定ですが、予定では第1回目の講演会を5月下旬ごろ、本連続企画の「イントロダクション」として、「戦争」と呼ばれる現象の歴史の変遷の確認を目的にした会を開催するつもりでおります。

本連続講演会への参加にご興味がおありの方は、今後センターのHPや学内外で掲示・配布されるポスター・チラシでの情報にご注目下さい。



連続映画鑑賞会「映画を通じて知るアジア太平洋の世界」(全5回)

アジア太平洋研究センター(CAPS)では今年度も引き続き、アジア太平洋地域を舞台にした映画を上映する鑑賞会「映画を通じて知るアジア太平洋の世界」(全5回)を開催して参ります。昨年度はそれまでの年3回開催から年5回へと回数を増やし、本企画の連続性も強化され、年間を通じての参加者も見られるようになりました。そこで今年度も、昨年度と同じ要領にて平日夕方の6時過ぎから、学内の講義室を利用して、普段あまり目にする事のないマイナーな映画、しかし当該社会の文化や諸問題なども考えるにふさわしい「名作」

をお届けするつもりでおります。

4月上旬現在、本企画に関する日程や上映映画は未定ですが、5月中に開催予定の第1回鑑賞会では、かつてイギリスがオーストラリアに向けて行った「児童移民」問題を告発した映画『オレンジと太陽』(2010年、イギリス・オーストラリア)を上映する予定です。どうかご期待ください。今後は、センターのHPや学内外で掲示・配布されるポスター・チラシを通じて本企画の詳細をお伝えして参ります。ご興味のおありの方は、どうか定期的にそれらをご確認いただければ、幸いです。

中神康博・愛甲雄一編『デモクラシーとコミュニティ

—東北アジアの未来を考える(仮題)』(未来社)の出版準備が進んでおります

2011年度までのアジア太平洋研究センター(CAPS)では、同年度のセンター設立30周年、2012年の成蹊学園創立100周年という節目のときを記念して、ほぼ2年越しで、さまざまな講演会・

夏休み前に、本書は店頭などで販売される予定になっております。ご関心のおありの方は、是非その節には本書をご高覧ください。

国際会議などを開催して参りました。そこでセンターでは、そうした記念事業の一環として行なわれた連続講演会「人間の安全保障と東北アジアースステイナブルな地域社会をめざして」(全7回)、ならびに国際シンポジウム「人間の安全保障と東北アジアーデモクラシーとコミュニティの未来」(2012年3月開催)にて得られた成果を形として残すことを目的に、講師やパネリストなどとして各企画にご参加いただいた方々のご論考を集めた論文集『デモクラシーとコミュニティ—東北アジアの未来を考える(仮題)』(中神康博・愛甲雄一編、未来社)の出版準備を現在進めております。本書には、右記のような著名な方々を含む、多様な執筆陣の論文や講演記録が含まれる予定です。

このまま各種手続きが順調に進めば

序 加藤節(成蹊大学名誉教授)
 総論 中神康博(成蹊大学教授)
 第I部・デモクラシー
 杉田敦(法政大学教授)
 板垣雄三(東京大学名誉教授)
 ブレンダン・マーク・ハウ(韓国・梨花女子大学校准教授)
 第II部・グローバルゼーション
 テッサ・モーリス＝スズキ(オーストラリア国立大学教授)
 サスキア・サッセン(アメリカ・コロンビア大学教授)
 岩渕功一(オーストラリア・モナッシュ大学教授)
 第III部・コミュニティ
 広井良典(千葉大学教授)
 金王培(韓国・延世大学校教授)
 沈潔(日本女子大学教授)
 愛甲雄一(成蹊大学アジア太平洋研究センター主任研究員)
 (以上は、現在予定されている本書の構成に基づくものです。)

センター叢書発刊のお知らせ

アジア太平洋研究センター(CAPS)が研究支援や助成を行なった共同研究プロジェクト(3年間)のなかから、また新たな研究成果物——大熊昭信・庄司宏子編『グローバル化の中のポストコロニアリズム—環太平洋諸国の英語文学と日本語文学の可能性』(風間書房)——がこの春に生まれました。本書はセンター叢書の一冊として、センター併設の図書館でも貸出を行なっております。ご関心をもたれた方は、是非積極的にご活用ください。

なお、編者の1人である大熊昭信・特別任用教授にご執筆いただいた本書の紹介文を、本ニューズレターのp.5に掲載いたしております。

お詫びと訂正

本ニューズレター先号(CAPS Newsletter, No.117 January, 2013)にて、印刷準備段階の不備により以下の誤植がありましたので、筆者・関係者の方々にお詫びいたしますとともに、ここに訂正いたします。

7頁目 右段 下から3-2行目(脚注中)
 誤「宇野重され昭 島根県立大学名誉教授」
 正「宇野重昭 島根県立大学名誉教授」

〈報告・アジア太平洋研究センター(CAPS)主催連続講演会〉

「統合と分裂の力学から見るアメリカ—過去・現在・未来」

第5回講演・野崎与志子氏

(ニューヨーク州立大学バッファロー校名誉准教授、CAPS客員研究員)

「ジェンダー・ダイナミクスとアメリカ社会—政治と経済と高等教育」

法科大学院教授 武田 真一郎

昨年(2012年)の秋、IMF(国際通貨基金)は「女性



〔写真は講師の野崎氏〕

性は日本を救えるか?」という緊急レポートを発表した。同レポートによると日本では働く女性の数が出産・子育てによって減少し、その後再び増加するというM字型カーブを描くが、これは先進国では日本だけに見られる現象であり、女性の労働力を活用することが日本と世界の経済成長にとって不可欠であるという。国際的な経済機関から日本社会の問題点を鋭く指摘されたことは衝撃的だったが、野崎さんの講演はアメリカのジェンダー論の歴史と現状をアメリカ社会に長く暮らしていた視点から伝えるものであり、上記の問題を含めた日本社会のジェンダーのあり方を考える上で大いに参考となった。

講演の最初のテーマはアメリカの女性参政権であった。アメリカで初めて女性参政権が認められたのは1869年のことであり、日本では戦後の1946年であるから(それは「押しつけ憲法」によるものである)、日本と比べるとその歴史は長い。現在、上下院議員のうち女性が占める割合は20%を超えているという。日本では現時点で衆参両院を合わせて11%程度だから、かなり遅れをとっている。

次のテーマは労働市場への参加であった。アメリカでは就業者の中に女性が占める割合はほぼ半数であるが、日本でも42%であり、それほど差があるわけではない。ところが管理職の割合を見ると、アメリカでは40%に達しているのに対し、日本では10%程度に過ぎない。アメリカでは子育て後に大学院に進学し、学位を取得して高い地位に就く女性も少なくないのに対し、日本では子育て後の再就職の多くは非正規雇用である。おそらく

このことが原因の一つなのだろう。

しかし、アメリカの女性管理職は「ガラスの天井」(glass ceiling)に覆われていると感じているという。これは、女性がキャリアアップを目指そうとしても、見えない天井があってトップの座には届かないことを意味している。アメリカにも女性の進出を阻む壁ならぬ天井があるようだが、この事実はあまり知られていないのではないだろうか。

講演の最後には、アメリカではフェミニズム思想が深化され、白人の経済的に恵まれた女性だけでなく、非白人、貧困層、障害者、レズビアン、高齢者を含むすべての女性の解放のための理論と実践であると考えられていることが紹介された。これは一部の「急進的なフェミニスト」の考え方というわけではなく、社会的に共有された認識であるようだ。あるいはこの点が日本の社会と根本的に異なる点なのだろうか。日本でも「女の解放は男の解放」といわれているが、このような認識が広く共有されることはなく、相変わらず男たちは家庭を顧みず、M字型雇用の窪みを埋めるために過労死するほど働いている。

筆者は質疑の際に「ガラスの天井」が存在する理由は何かと質問したが、それは必ずしも女性に対する差別意識ではなく、出産・子育てによるキャリアの中断が原因ではないかと考えられるようである。やはり男女共同参画を進め、女と男を解放するためには、出産・子育てに対する支援が不可欠なのであろう。

さて、わが成蹊学園はこのことの重大性をいち早く認識し、教職員と地域住民のための保育所設置を進めてきたが、突然中止されてしまった。武蔵野市も予算を計上し、「ものご保育所」と仮称まで決まっていたのだから、実に大きな後退である。費用と責任を伴う保育所をあえて設置する理由を学生に考えさせることは大きな教育効果を生み、少子高齢化の中で成蹊学園の存在感を示す絶好の機会となったはずである。せっかく新しいガバナンス体制が発足したのだから、ぜひ再考していただきたいものである。開所の暁には冒頭のレポートをまとめたIMFのクリスティーン・ラグルド専務理事も感激し、あるいは見学に訪れるかも知れない。

センター叢書紹介

大熊昭信・庄司宏子編『グローバル化の中のポストコロニアリズム

—環太平洋諸国の英語文学と日本語文学の可能性』（風間書房）

文学部特別任用教授 大熊 昭信

文学研究においてポストコロニアリズムといった理論を杓子定規に作品解釈にあてはめる場合には、作品内の多くの具体的な事実が見落とされる。そこでそうした事実を拾い集めてその意味を再考するのがニューヒストリズムや文化研究の立場であるが、これもまた理論、方法に変わりはないから、その手法のレンズから見落とされる部分が生じてしまう。ド・マンのいう洞察には盲点がつきものであるというパラドクスをほくらはついに逃れることができない。

だが、既成の理論を適用するのではなく、あらたな理論を創造し、あるいは既成の理論をずらし、作り替え、再生しようと試みる場合、その場合でも明察の死角を回避することは不可能なのだが、新鮮なパースペクティブの下で、新たな発見や、新解釈の可能性が生まれる。

今日、多国籍企業やインターネットや人々の頻繁な移動が、もはや国境を亡きものとしている。そうしたグローバル化の津波のなかで、ほくらの眼前には、多文化的な社会があり、たとえばそれを乗り越えようとする多文化主義といった政治的試みがある。だが、残念ながらそれはたんなる異文化の併存か、ドミナントなマジョリティ文化がマイノリティ文化を排除し吸収し消滅させる事態となっている。ポストコロニアリズムの思想とその遺産は、そうした文化帝国主義やネオコロニアリズムのなかで、あらためてその有効性を発揮すると思われる。

グローバル化のなかで、異文化同士は、互いに影響し合い、それぞれ独自な変容を遂げている。これは文化化、同化、文化変容、あるいは擬態や異種混合といった言葉で捉えられてきた事態である。そうした異文化間の関わりを踏まえて、異文化の併存の状況をそのまま持続させようという多文化主義にたいして、異文化間を移動し、多様な文化を混在させてあらたな文化を創造しようという通文化主義がある。それは文化のクレオール化を目指す運動とも連動している。なるほど、異文化の混在は、異文化を融合させあらたな文化を創造するという豊かな営為を促している。だが、そこには、文化そのものから離脱する契機もまたある。人間は一定の文化に生まれ落ち、そこでアイデンティティを確立するが、それに固執するとき、そこに民族と民族、国家と国家の相克が始まるの

である。だが、同時に異文化の存在は、そうやって文化に呪縛されている自己のありようを自覚させる重要なきっかけにもなる。異文化の併存は、そのような脱文化化を促す文化と文化の間を用意している。ほくらはそう

した脱文化化の試みをハリスからホミ・ババをへて、ラシュディ、キャリル・フィリップスの文学的営為にみてとることができる。それをほくらは間文化主義という。本書の密かな野望は、具体的作家の多文化的状況での振る舞いを分析することで間文化主義を理論として練り上げることである。

序論「間文化的状況から間文化主義」では、環太平洋諸国やポストコロニアリズムの定義を取り上げたあと、如上の論旨をいささか体系的に概説する。以後、各論では、そうした前提を踏まえながら環太平洋諸国の個別作家の営為を検討している。カナダは、松田寿一氏がアトウッドの『サバイバル』を論じ、アメリカ合衆国は、坂口加代子氏のソール・ベロー、上石実加子氏の中国系のエイミ・タン、阿部暁帆氏のポール・マーシャル、庄司宏子氏のホーソンの「ラパチーニの娘」の各読解が示され、またオーストラリアやニュージーランドは、阿部陽子氏がD・H・ロレンス『カンガルー』を、大熊がサマセット・モームの南海に取材した短編小説集『この葉の戦ぎ』を解釈し、フィリピンは、岡田泰平氏がN・V・M・ゴンザレスの『バンブー・ダンサーズ』を、朝鮮半島は徳岡麻絵子氏が韓国系のキャシー・ソンの詩集『写真花嫁』をそれぞれ論じている。そして最後に大熊が文化化と脱文化化の現れをポール・マーシャル、イシュメール・リード、キャリル・フィリップス、マイケル・オンダーチェに見られるジャズの表象をめぐって検討して本書を締めくくっている。



シリーズ・若者たちのアジア太平洋世界(第14回)

『CAPS Newsletter』では2009年度から、成蹊大学所属の若手研究者や学生が行なっているアジア太平洋世界に関する研究・諸活動について、彼ら自身によって紹介された記事を定期的に掲載しております。今回は、国際教育センターにて主に第二言語としての英語教育に携わっておられる石井友子先生にご登場いただきました。

健やかなるコミュニケーションのために

国際教育センター常勤講師 石井 友子

私は第二言語における語彙習得を研究課題としている。最初に語彙習得を研究対象にしたきっかけは「卒業論文の為に追実験しやすい論文に出会ったから」と、あまり大きな声では言えないものだ。しかしその後私の語彙への関心はかれこれ15年続いており、当面変えるつもりもなく、たまたまにしては良いテーマに巡り会ったと思う。

もっと遡って、漠然と言語に興味を持ったきっかけは、高校の英語の時間に出会った読み物である。書名や著者名を覚えていない事が甚だ残念であるが、「言語と文化」というような題名の読み物だったと記憶している。その中にはソーシャル、サピア、チョムスキーといった言語学の基礎講義で習う名前が並んでいた。高校生だった私は「人の思考は使用言語によって変わる」とか「人には生まれながらにして言語獲得能力が備わっている」といった言語の神秘に夢中になり、大学で言語学を学ぶことを決意した。赤ん坊が数年で言葉を操れるようになること、人間が言葉で複雑なメッセージを交わすこと、そんな当たり前のことを言語学は驚きとして提示してくれた。そのうち私の興味は「言語を使える人間ってすごい」から「二言語（以上）を操れる人間ってすごい」に移り、そして冒頭に書いたような経緯で語彙習得研究と出会った。

ふらふらと迷い込んだこの分野から離れずにいるのは、言語において語彙が果たす役割が大きいからであろう。言葉の覚えられない国に旅行する際、辞書と文法書のどちらを携帯するかと問われれば、多くの人は辞書を選ぶだろう。もちろん文法も大事だが、どんなに文法が洗練されていても語彙がなければ、それはまるで食材が手に入らない料理人のようなものだ。



〔手作業の重みが偲ばれる West (1953) 〕

考えてみれば、食材と単語には共通点が多い。例えば野菜の中には玉ねぎのように頻繁に使用されるものもあれば、フキノトウのように一般家庭ではあまりお目にかからないものもある。単語も同様に、よく使用される高頻度語彙から、一生出会わないかもしれない低頻度語まで様々だ。ある単語が使用される頻度は、学習者がその単語に出会う確率を示し、その単語を学習する価値がどの程度あるかを示す。料理でも、フキノトウよりは玉ねぎの扱いを覚えた方がレパートリーも広がるだろう。1953年に Michael West が出版した General Service List は学習者にとって最も有益と思われる2000語を提示した。当時は手作業でなされた膨大な分析も、コンピュータの普及によってより細分化された分析が可能になり、学習者の役に立っている。

また、食材に相性があるように、単語にも「コロケーション」と呼ばれる相性がある。「薬を飲む」は take medicine であって drink medicine ではないというのはその一例だが、言語にはもっと見えにくく厄介なコロケーション上の制約が多数あり、学習者を悩ませている。調理の際には各料理に適した食材の切り方があるが、これは単語というなら名詞形・形容詞形など、派生をきちんと整えることだろう。そして類義語もまた学習者には悩みの種である。例えば good と nice はどちらも「良い」という意味で、どちらを使っても構わない場合もあるが、文脈によってはその選択を間違えると、褒めるつもりがけなすことになってしまいかねない。これも長ネギの代わりに玉ねぎを使っても美味しく出来上がる料理もあれば、全く異なる味わいになってしまうものもあるというのに似ているだろう。「単語を知っている」ということには実に多くの側面が関わっており、その複雑さが語彙習得研究の深みであり、面白さである。

有能なシェフ（言語使用者）になるためには、食材（単語）を適切に選び、切り（派生）、適切に組み合わせ（コロケーション）、調理技術（文法）を磨く必要がある。語彙習得研究は、食材について分析する事、料理人に食材に関する知識や技術がどの程度備わっているかを知る為の手だてを開発する事、そしてその知識や技術はどうすればより伸びるのかを模索する事などを指すものである。これからも教室で出会う学生たち、そして日本中にいる多数の学習者が、少しでも美味しい料理を作り、健やかなコミュニケーションが取れるよう、教育と研究に精進したい。

〈寄稿〉

沖縄・ソウルのアーカイブを訪ねて

CAPS 客員研究員 高一

2013年2月中旬、沖縄を訪れた。行き先は、那覇市内からバスで30分ほどの南風原町にある沖縄県公文書館である。バスを降りて公文書館入口に着くやいなや驚いてしまった。正直、県公文書館ということで地域の公共図書館のような規模の建物をイメージしていたのであるが、その堂々たる外観に思わず立ち止まってしまったのである。ちなみにこの建物は公共建築百選にも選ばれたという。

さて、公文書館内部について少し述べてみたい。所蔵資料に関しては、沖縄県文書、琉球政府文書、米国政府等関係機関文書が、その中心をなすといっていだらう。特徴的なのは、近代日本の歩みと戦争、そしてアメリカとの関係が所蔵資料に色濃く反映されている点であろう。これは文書資料のみならず、沖縄公文書館が戦中・戦後における記録写真や映像資料を豊富に所蔵していることから明らかである。これらの資料が研究者ならずとも市民・学生に広く利用されているようであった。実際に筆者が訪れた日も2階の閲覧室では10名以上の学生が資料を閲覧していたように、思いのほか多くの利用者で公文書館はにぎわっていた。また、一階には展示スペースと講堂が設けられており、常設展示があるとともに企画展示会、映写会なども企画されていた。

このように所蔵資料、展示内容、そして堂々たる建築、それらの全てから、公文書館というものが沖縄にとってきわめて重要な存在として位置付けられていることを実感することができた。

ところで、2月下旬、筆者は沖縄公文書館に引き続き、その韓国外交史料館を訪れた。韓国外交史料館はソウルを流れる大河、漢江南側の瑞草区に位置しており、2006年4月に開館している。

韓国外交史料館では、大韓民国政府樹立以降の韓国外交文書を閲覧することができる。所蔵の韓国外交文書は、韓国外交史研究のみならず東アジア国際政治史研究においても利用されてきている。とりわけ1960年代後半以降の文書は利用頻度が高いようだ。近年注目すべきは、沖縄返還を巡る日米関係および日米韓関係に関する研究において、韓国外交文書に依拠した研究が一石を投じていることであろう。

韓国外交史料館は、冷戦期の朝鮮半島をめぐる東アジア国際政治史を研究する筆者にとっても非常に貴重な存在である。実際に、1960年代後半から70年代前半にかけての韓国外交文書を利用できたことは、博士論文執筆の大きな助けとなった。

筆者にとっての韓国外交文書の閲覧と収集は2002年の韓国留学時代にさかのぼる。当時は、韓国外交通商部所属の外交安保研究院の中に設けられていた小さくて窓の無い閲覧室で文書とにらめっこしていた。この留学時に韓国外交文書に接したことをきっかけにして、その後2005年まで定期的に訪れるようになった。それが、外交史料館としてアップグレードし、開放感のある閲覧室を備えるようになったのには隔世の感がある。



〔沖縄県公文書館の建物（筆者撮影）〕

韓国外交史料館も、沖縄県公文書館と同様に様々な展示に力を入れている。1876年の開港以来の主要な外交文献や写真・記念物が展示されており、韓国の外交の流れを一目でつかめるようになっている。博物館としての機能も持たせているとのことであった。

興味深いのは外交史料館が児童・生徒を利用対象として想定している点である。小学生と中学生を対象にした「外交官学校」を開校していることは「目玉企画」の一つであろう。4回連続講座として土曜日に催されており、現職外交官が講師を担当することもあるという。このような企画以外にも、史料館は児童・生徒による社会科見学として利用されている。文書閲覧室も見学コースに入っており、筆者も一度「見学」されることがあった。この時ばかりは苦笑いせざるをえなかったのであるが。

以上に述べたように、2月の後半に沖縄と韓国・ソウルの文書館を駆け足でまわってきたが、両者に共通するのは市民との距離が近いことであった。このように史料館と市民の距離が近いことは、将来的に人々の「知る権利」の向上につながることも文書公開をも促進するという点においても望ましいことである。

2012年度新規プロジェクトの紹介(第4回)

(2012年度共同研究プロジェクト)

日韓比較メディア研究—情報と文化の位相

文学部 特別任用教授 奥野 昌宏

日本と韓国は、地理的にも、歴史的、文化的にも一衣帯水の関係にありながら、しばしば「近くて遠い国」と称されてきた。過去の不幸な歴史が両国関係の現在にも暗い影を落とし、さらにその時どきの政治的不協和を敏感に感じ取る国民の意識がそこに投影されることで、この不協和が社会的に増幅される、ということも少なくない。このことで両国関係は依然として不安定さを内在させたままである。

たとえば1998年の金大中大統領訪日時での共同宣言では、日韓パートナーシップや善隣友好協力関係がうたわれ、日本の植民地支配への反省とお詫びも明文化された。韓国では日本の大衆文化の開放政策が進められ、日本では「シュリ」や「JSA」といった映画が話題を呼び、「冬ソナ」の人氣が沸騰した。いわゆる「韓流」ブームの始まりである。韓国の大衆文化を通じて韓国にたいする関心も一段と高まっていった。この間、2002年のサッカー・ワールドカップでは両国がこれを共催し、両国民が互いに応援し合う光景も見られた。こうした模様がメディアを通じて大々的に流され、友好が強調された。このような政府レベルの関係改善の努力や、大衆文化やスポーツを通じた相互交流が、当時両国をより「近い」関係にする気配を垣間見せた。しかし、揺らぎ続ける政治状況やこれに共振する国民感情が、関係改善にたいする楽観視を安易に許さないのもまた一方の現実である。

関係の緊密化や意識の親密化がある一方で、その後も現実の政治は友好と反目の間を行ったり来たりしている。その一大要因が「歴史認識」の問題であることは言を俟たないが、時としてそれぞれの国内政治や国内世論とも絡んで愚行を繰り返してきた。そして、政治・外交におけるこの振り子運動が両国民の相手国にたいする距離感に少なからぬ影響を与えてもきた。そして、政治と両国民の意識との間にはメディアが介在し、相互の距離感や評価に大きな影響を及ぼしてきた。メディアは人びとに両国関係を考えるうえでの有用な情報を提供すると同時に、時に双方の軋みに共鳴し、これを増幅する装置としても働いてきた。

いまや相互に主要な貿易相手国であり、日に延べ1万人以上が往来する。また韓国の大衆文化はブーム的時期を過ぎ日常化の域に至っている。こうした実情を踏まえて、私たちはあらためて情報や文化の相互交流やそれを媒介するメディアのありようを考えたい、いわば「情報と文化の日韓関係」あるいは「日韓関係とメディア」の解明を模索



〔日韓共同開催「柳宗悦展」の会場となる徳寿宮美術館（在ソウル）。この企画は日本民藝館と韓国現代美術館の協力で準備が進められている。本年5月～7月に同会場にて開催の予定であり、文化協力事業の一例となる。〕

しようとしているのである。そして願わくは、この研究が両国関係の改善・安定化、そして両国民の相互理解に一助をなすことができれば、と考えている。なお、ここでは現代の事象だけでなく交流や理解に関する過去の足跡を辿ることや、大衆文化だけでなく博物館・美術館等の交流・提携事業も視野に入れている。

本研究プロジェクトのメンバーは次のとおりである。日本側：奥野昌宏（成蹊大学・プロジェクト責任者）、中江桂子（成蹊大学）、市川孝一（明治大学）、大石裕（慶應義塾大学）、鈴木雄雅（上智大学）、田中則広（日本放送協会）、韓国側：金政起（韓国外国語大学校・名誉教授）、李鍊（鮮文大学校）、金泳徳（韓国コンテンツ振興院）（以上、研究分担者）、蔡星慧（学習院女子大学ほか）、小林聡明（東京大学・ソウル大学校）（以上、研究協力者）。

2012年度には以下のとおり研究会を開催したほか、国内外において調査や資料収集等を行った。第1回：2012年5月18日（プロジェクトに関する協議）、第2回：6月16日（金泳徳「韓国におけるコンテンツ振興の推進体系と事業の現状」）、第3回：7月20日（小林聡明「韓流の原点？—韓国広報文化外交の夜明け：1960～70年代」）、第4回：9月14日（蔡星慧「イメージとしての韓国、体験する韓国—ポスト韓流の課題と期待」）第5回：11月9日（田中則広「イ・ミョンバク政権下の放送政策を検証する—「総合編成チャンネル」を中心に」）、第6回：12月15日（金大衛＝KBSジャパン「日韓両国のメディア状況と日韓関係」）、第7回：2013年2月8日（呂元柱＝朝鮮日報「韓国新聞の現状」）。

〈2013年度 研究プロジェクト一覧〉

	責任者名	研究題目と目的
共同研究プロジェクト	三年目	自発的貢献行動研究 (期間: 2011.4.1 ~ 2014.3.31) 題目: 組織に対する従業員と顧客の自発的貢献行動の統合的研究 目的: 本研究は、従業員と顧客、さらには周辺住民が組織に対して行う自発的貢献行動やその相互作用に注目し、その先行要因や影響を概念的ないし実証的に明らかにするものである。
		中国の廃コンクリートリサイクル研究 (期間: 2011.4.1 ~ 2014.3.31) 題目: 中国における廃コンクリートリサイクル利用技術の評価 目的: 中国における廃コンクリートの環境浄化技術への適用可能性について検討を行う。これまでに検討してきたCCS、乾式排煙脱硫、下水中のリン回収への適用以外にも、砂漠化土壌における改良や重金属汚染土壌における除去を評価する。さらに、各種技術の環境改善評価以外にも、エネルギー、コストにおける評価も行う。
	二年目	日韓比較メディア研究 (期間: 2012.4.1 ~ 2015.3.31) 題目: 日韓比較メディア研究——情報と文化の位相 目的: 日韓両国におけるメディア環境と情報・文化の生産と受容の実状を明らかにし、その知見を通じて両国の相互理解に資することを目的とする。
	一年目	近代中国の危機言語と言語政策研究 (期間: 2013.4.1 ~ 2016.3.31) 題目: 近代中国の危機言語と言語政策 目的: 中国の危機言語問題および言語政策の実態を解明し、それを通して、中国の近代文化と制度に対する理解を深めることを目的とする。
		合衆国における「労働」の文化表象研究 (期間: 2013.4.1 ~ 2016.3.31) 題目: 合衆国における「労働」の文化表象 目的: 1970年代以降、科学技術の進展や社会変化により労働の概念は拡大・変質した。本プロジェクトでは合衆国における文化表象において、古くて新しいさまざまな形の「労働」がどう扱われているかを探る。
パイロットプロジェクト	異文化会話エージェント研究 (期間: 2013.4.1 ~ 2014.3.31) 題目: 非言語コミュニケーションにおける文化比較と会話エージェントへの応用 目的: eCUTEは、コンピュータ技術を利用して、異文化への気づきと理解を支援しようとするEU EP7のプロジェクトであり、ヨーロッパ4カ国と日本との共同で実施している。本研究は、eCUTEプロジェクトにおいて、特に日本人とドイツ人の非言語行動の違いについて日独共同で分析し、そのような行動を模倣することができるヴァーチャルエージェントを実装し、異文化理解への応用可能性を検証することを目的とする。	

〈寄稿〉 トクヴィルとカナダ—古きよき「フランス」の発見とそのジレンマ

CAPS主任研究員 愛甲 雄一

アレクシ・ド・トクヴィル(Alexis de Tocqueville 1805-1859)といえば、その思想がフランソワ・フュレに代表されるフランス革命研究の「修正主義」と呼ばれる潮流、現代社会における中間集団・小規模コミュニティの消滅とそれに伴う個人の孤立とに警告を発する社会資本論、さらには、ひとつの自発的政治/社会参加に現代政治の突破口を見出す市民社会論などにおいて、注目を浴び続けている人物である¹。そのさまが近年「トクヴィル・ルネサンス」とまで呼ばれる活況を呈していることは、よく知られている。その際、ひとつの関心が向けられるのは主として彼の名著『アメリカのデモクラシー De la démocratie en Amérique』(1835・1840年)であることも、周知の通りである。この作品は、1831年5月～32年2月の約9か月間にわたりトクヴィルが北米大陸に滞在したときの見聞・調査をもとに執筆されたもので、彼が「デモクラシー」という言葉で表現した「近代大衆社会」の

きわめて先駆的かつ鋭い分析であり、単なる19世紀アメリカ論を超えて、現代社会の理解にも資する実に啓発的な作品として今日受け取られている。しかしまさにその北米大陸滞在中、トクヴィルがアメリカの北に位置するカナダを訪問した事実は、昨今日本で出版されているおびただしい数のトクヴィル関連本も含め、ほとんど注目されることがない。その訪問は実に短期間に過ぎず、しかも『アメリカのデモクラシー』における分析対象はあくまでもアメリカであるから、この訪問に人びとが注意を払わないで来たとしても、さほど不思議はないといえよう。ところが、そのカナダの地でトクヴィルが行なった観察には、あまり関心の向けられることのない彼の「ナショナルステック」なフランス観、政治社会に関する彼の理想と現実との間に横たわるジレンマなどが映し出されており、その意味でたいへん興味深い認識が示されている。しかも、その地で得られた見聞が後

になって、彼が政治家として活躍した時期のアルジェリア植民政策論として結実したとの指摘もなされており、したがって彼のカナダ滞在記を振り返ることの意義は、トクヴィルの思想形成史を辿る上でもけっして少なくない。

そこでこの小論では、トクヴィルがカナダに対しどのような関心を抱き、その社会や人間についてどのような考えを抱いていたのか、簡単ではあるが彼の残した記録をもとに紹介していくことにしたい。

トクヴィル、および彼の親友でかつアメリカ行き同行者であったギュスターヴ・ド・ボーモンは、アメリカに渡るまでは、カナダを訪れるつもりなどとくに予定してはいなかったようである。しかしニューヨーク滞在中に知り合ったとある人物から、今もカナダに住んでいるというフランス語を話す人びとの話を聞いたことが、その地についてふたりに興味を抱かせるきっかけとなる。周知の通り、セント・ローレンス川周辺から五大湖北部に広がっていた当時のカナダはかつて「ヌーヴェル・フランス」と呼ばれ、七年戦争(1756-1763年)真っ只中の1760年、ケベック・シティ近郊のアブラム平原にてイギリスに決定的敗北を喫したことから、1763年のパリ条約で完全に失われてしまったフランスの旧植民地であった。ただ新たな宗主国イギリスはフランス系入植者を追放するようなことは基本的にせず、彼らに対する強引な同化政策も手控えたことから、イギリス系住民に対する二級市民の地位に甘んじながらも、彼らの多くはその地に留まり続ける(トクヴィルの訪問時、その数は50万人以上にも達していたらしい)。そこで、そうした英領フランス人たちに出会い話を聞くことをひとつの目的に、トクヴィルらは五大湖方面をめざしてニューヨークの地を離れたのであった。彼らがアメリカに到着してからの約2か月後、1831年6月末のことである。

彼らはまずオールバニヤオナイダ湖、バッファローなどニューヨーク州の各地を訪問、さらにはデトロイトやヒューロン湖・ミシガン湖など五大湖西部のかなり奥まで足を延ばしてから、その後は来た道を帰るようにしてエリー湖を東進、8月20日には、再びバッファローの地に戻っている。その後いよいよトクヴィルらが訪れたのが、当時



〔カナダの訪問直前にトクヴィルも訪れたナイアガラの滝(筆者撮影)〕

は「ローワー・カナダ(低カナダ)」と呼ばれ今はケベック州南部に相当するフランス系住民が多数を占める(全住民の9割ほどだったという)「カナダ」であった。彼らは船でオンタリオ湖とセント・ローレンス川を移動し、8月23日にモントリオールに到着、さらにケベック・シティに向かいそこに1週間程度滞在した後、9月2日にはモントリオールに戻り、ほとんど間を置かずにアメリカへと出発している。したがってトクヴィルらのカナダ滞在は、船中のそれを含めたとしても、せいぜい10日そこそこのことに過ぎなかったといえよう。ただこの旅程を見てもわかるように、当時はまだヨークと呼ばれていた首府トロント、あるいは後に首府が一時置かれるキングストンなど、イギリス系カナダ人が多数を占めるいわゆる「アッパー・カナダ(高カナダ)」は、彼らにとって完全に関心の外にあった。トクヴィルらにおけるカナダ訪問の目的は、あくまでそこに生活するフランス系住民の観察にあったのである。

ただ実を言えば、トクヴィルらはカナダに入る前の道中において、既にそうしたフランス系住民の片鱗を目にしていた。彼らがその経験をしたのは、やはりかつてフランス植民地の一部で、当時人口2500人程度のなかに多くのフランス系住民を抱えていたデトロイトではなく、彼らがそこから赴いた未開の森林地帯を抜ける小旅行の目的地、すなわち人口30人程度しかいなかったサギノー(現ミシガン州北部の小都市)であった。その辺境の地でトクヴィルはあるフランス系住民に出会い、その人物が一見「インディアン」とも見紛うほどに荒野の生活・慣習に溶け込んでいながら、その実依然として「陽気かつ活動的で、華々しいひとりのフランス人、自らの起源に誇りを持ち、軍事的な栄光を熱狂的に好み、利益よりも虚栄心にあふれ、理性よりも最初の行動に従う本能の人物であって、金銭よりも騒ぎを好む」フランス人——要するにトクヴィルの考えによるところの典型的な「フランス人」であったことに、感嘆の声を上げている(I, 402)。この人物は「町の通りよりも未開の地での生活を好み、農業よりも狩猟を好む」人物であり(Ibid.)、そしてさらにトクヴィルにとって興味深かったことに、その隣人のイギリス系アメリカ人とはほとんど対照的な存在であった。その隣人は「冷淡かつ頑固で、情け容赦をすることのない論争家である。土地に執着して・・・絶えず未開の生活と戦っており、その未開生活の属性となっているものの一部を日々そこから取り除いている」(I, 403)。こうしたトクヴィルの観察がいかなる評価と表裏一体のものであったか、それは彼が「高貴な野蛮人」である「インディアン」の伝統的習俗・生活にきわめてロマン主義的な憧憬を抱いていた事実を考慮するならば、火を見るよりも明らかであろう。つまり、欧米社会を襲っていた「文明化」の訪れを是として疑うことのない即物的価値観に拠るアングロ・サクソンの習俗に対し、伝統的フランス人に見られる習俗こそを、トクヴィルはより好ましいものと見ていたのである。そし

て、この彼の「ナショナリズム」とも呼び得る認識こそが、「ローワー・カナダ」に関するトクヴィルの観察においても、その端々から見出せるものであった。

トクヴィルが「ローワー・カナダ」で出会ったフランス系住民は、サギノーでのそれと同じく、本国フランスのフランス人たち以上に「フランス人」としての特性を残している人びとであった。彼らは「陽気で生き生きとしており、冷やか好きで、華々しさと騒ぎを好み、知的でかつきわめて社交的である。彼らの習俗は穏やかでありその性格は世話好きであって、そしてフランス本国に比べても一般にたいへん道徳的で、来客を暖かくもてなし、また信仰心に厚い」(I, 211)。この観察結果は、彼が現地で言葉を交わした人びとからも繰り返し得られたフランス系住民に関する評価でもある。その証言のなかには、これら「カナダ人」は狩猟者ではなく農民であったが、やはりサギノーのそれと同様「インディアン」との融合度が高い、との発言も含まれていた (I, 59-60)。ゆえにフランス系住民は知性の点ではアメリカ人に劣るかもしれないが、しかし心情の点では優れており、後者にはない素朴な親切心を有している、ともトクヴィルは言う (I, 206)。要するにイギリス人ないしアメリカ人との違いはここでも強調されているわけだ、彼によれば、これらアングロ・サクソン系の人びとは粗野ないし冷淡であるうえ、その行為や言動にはつねに「金儲け主義 mercantile」の精神が現れていた (Ibid.)。それに対し、フランス系住民の方は素朴さの中にも豊かで安定した生活を謳歌しており、きわめて幸福の状態にある様子をトクヴィルは見出したのである。

こうした「カナダ人」の姿はトクヴィルをして、自らのフランス人としてのアイデンティティ、ひいては彼の「ナショナリズム」をもまた満足させるものであったろう。ただ同時に、その「ナショナリズム」はここ「ローワー・カナダ」において、別の形でも強い刺激を受けざるを得なかった。というのも、そうした一見幸福そうなフランス系住民が圧倒的多数を占めるこの社会において、少数派であるイギリス系の人びとが富や商業権益をほぼ一手に独占していたからである。町に見られる掲示・看板にすら英語のものが目立ち (I, 202)、彼がケベック・シティで見学した法廷でも、その眼に映ったものは二言語併用によるきわめて奇妙な光景でしかなかった。ここにトクヴィルは、「ある人民にとって取り返しのつかない最大の不幸は、征服されることである」との確信を抱く (I, 205)。そし

てこれら「カナダ人」が将来イギリス支配の軛を取り除けるかどうかについて、「ナショナリスト」としての彼は、このカナダ滞在中ずっと思案し続けるのである。

トクヴィルの危惧は、「フランス人」としての特質を維持しているこれらの「カナダ人」が、移民によるアングロ・サクソン系住民の増加、あるいは婚姻などを通じた同化の進行などによって、いずれ消滅してしまうのではないかと、というところにあった (ex.: I, 209-210)。ゆえに、「征服」から四分の三世紀以上が経過してもフランス系住民の民族的・文化的特質は喪われていなかったわけだが、やはりトクヴィルの考えでは、彼らが「いつか、自分たちだけの素晴らしき国家を新世界において形成する」ことが望ましい (I, 202)。そこで彼は、多くの現地人に対し、近いうちにフランス系住民がイギリス系支配層に反旗を翻す可能性があるか、繰り返し尋ねたのである。ところが彼らの答えは、トクヴィルにとって一様にあまり好ましいものではなかった。というのも、彼の質問に人びとはほぼ等しく、ある程度



〔現在のケベック・シティ旧市街 (ローワー・タウン)の様子 (筆者撮影)〕

の妬み・嫉みがイギリス系支配層に向けられていることは確かだが、しかし「カナダ人」のほとんどは現状に満足しており、無理をしてその支配から抜け出すことに何の利益も見出していない、と答えたからである (ex.: I, 55)。実際には、トクヴィルらがカナダを訪れた6年後の1837年、フランス系急進派である愛国者党の大規模反乱が起こっており、その指導者ルイ＝ジョゼフ・パピノーは、1831年の時点でも既に絶

大な影響力を振るっていた (しかもトクヴィルにとってケベック・シティでの主たる情報源となったジョン・ニールソンは、1834年までパピノーの重大な同盟者と見られていた)。が、トクヴィルがこのパピノーについて触れた箇所は、彼のカナダ訪問記録のなかにはまったく見当たらない。ゆえに、現地で交わされたさまざまな会話を根拠にトクヴィルは、「カナダ人」たちの「憎しみは一般にイギリス人たちに向けられているというより、むしろ政府に向けられている」との結論を引き出したのである (I, 209)。

トクヴィルは「カナダ人」の存続可能性について、全面的に悲観していたわけではない。その地域が「ローワー・カナダ」としてひとつの州を制度的に形成していること、それを消滅させようとした1822年のイギリスの試みが失敗に帰したことなどを理由に、今後もフランス系とイギリス系とが分離したままである可能性は少なくない、との見方もまた披露している (I, 210-211)。しかし他方で、トクヴィルの称賛した彼ら「カナダ人」に見

られる「フランス人」としての特性こそが、逆に彼らの存続を危うくしている、との印象も彼は抱いていたようだ。というのも、彼と言葉を交わした多くの相手が、「カナダ人」は現状の小さな幸福に満足する保守的な存在だと述べ (ex.: I, 52)、実際トクヴィル自身も直接とある農民から「あなたは隣人の妻がよりかわいい眼をしているからといって、自分の妻を愛さないものでしょうか」という表現によって、新たな開拓地を求めず自分の狭量な土地に満足するその理由を説明されているからである (I, 208-209)。トクヴィルが「これらの人びとは[誰かには]指導され得る存在ではあるものの、自らを自分たちで導いていけるようにはまだなっていない」と指摘したのも、こうした「カナダ人」の保守性を目の当たりにしてのことであった (I, 207)。

ところでトクヴィルはこのカナダ滞在中、この「フランス」らしさの残る土地で封建制がどの程度残っているのかに関心をもち、それについても、やはり繰り返し現地の人びとに質問している。この点が興味深いのは、彼が後に『アンシャン・レジームとフランス革命』のなかで、自治性の高い封建的諸制度の解体・消滅がフランスにおける行政の中央集権化を生んだとの見解を示しており、その変化をフランスでの自由抑圧の原因として暗に批判しているからである。トクヴィルによれば、自らの領地や特権領域で独立性を保っている「貴族」の存在こそが、王権ないし中央政府による権力集中への重要な防波堤となるものであった (III, 143-154)。ところが、彼がカナダで出会った人びとは等しく、封建制の残滓はある程度見られるものの既に領主と農民との間に過酷な格差はなく、したがって政治的にも経済的にも、ここカナダでの平等化はかなり進んでいる、との答えを与えている (ex.: I, 51) (その後トクヴィルは『アンシャン・レジーム』の註において、フランス植民地時代の政策が「ローワー・カナダ」を完全に中央集権的な社会にしてしまった、と指摘することになる [III, 270-271])。ここにトクヴィルは、「カナダ人」の上流階級・教育ある階級においては、もはやイギリス系支配者に抗してフランス系住民の自由を守る「貴族」としての指導力は期待できない、と知るわけである。事実、トクヴィルの見たところ、彼ら上流階級は既に「根っここのところで、習俗・考え・言語においてイギリス人」でしかなく、カナダを独立へと導いていける強力なリーダーシップをもつ人物は誰一人として見当たらなかった、とも述べている——ただ他方で彼は、この「貴族」としての役割をカナダでは、フランスとは異なり一般の人民から遊離していないカトリック教会の司祭に期待できるかもしれない、とほのめかすのだが (I, 207-208)。

以上のように、よき「フランス」を今日でも保っている「カナダ人」の存続は、トクヴィルの眼から見れば、あらゆる方面で危機的な状況に置かれていた。ゆえに彼は、『アメリカのデモクラシー』第一巻のなかで、「古い習俗の伝統を忠実に保持してきたカナダのフランス人は、既にその地で生きる

ことが困難になっている」との指摘を行なったのである (II, 328)。そしてトクヴィルにとっての大きなジレンマは、そのような状態にあるフランス系住民が今後生き残っていくためには、イギリス人やアメリカ人に見られるような習俗を彼らが体得していく以外にはや道はない、と彼が感じていたらしい点にあった。今引用した文に続く記述のなかで、トクヴィルは、啓蒙され愛国心と人間性に満ちた一部の「カナダ人」が、素朴な生活に満足している保守的な同胞に向け檄を飛ばし、新たな開拓地を求め荒野に赴き、富の獲得に奔走せよ、と彼らを叱咤していた事実に触れている (Ibid.)。淡々としたこの記述において、トクヴィルがその「カナダ人」の処方箋を支持するかのような表現は、確かに直接には出てこない。ただ、彼言うところの「金儲け主義」的なアメリカ人の精神が広まってくる様子を不可逆的な歴史の摂理として描く『アメリカのデモクラシー』の通奏低音を前提にするなら、「カナダ人」が古きよき「フランス」の習俗に留まっていることはもはやできない、と彼が考えていたらしいことも、否定できないといえよう。「新世界では、自分で考え自治を行なう習慣が不可欠である」との理由から、フランスによる植民地カナダの喪失を説明したのも、彼自身であった (II, 475)。

ただそのような変化は、トクヴィルの感嘆した「カナダ人」がイギリス人ないしアメリカ人と同化してしまう可能性をも意味するものであり、「フランス」に強い愛着を抱いていた「ナショナリスト」トクヴィルにとって、きわめて受け入れ難いものでもあったはずだ。貴族の出でありながら、「デモクラシー」という平等化の流れを「神の摂理」と見なさざるを得なかったことに起因する、彼のジレンマ。個人主義的な「経済人 *homo economicus*」の跋扈する「文明社会」に違和感を抱き、荒野での未開生活にロマン主義的な憧れを抱きながら、しかし「現世」での成功や名声の獲得という野心も捨てきれなかった、彼のジレンマ。数多のトクヴィル論で繰り返し指摘されてきたこの種のジレンマは、カナダの訪問記から浮かびあがってくる彼の「フランス」ないし「フランス」的なものに対する「ナショナリスト」な愛着をめぐっても、やはり同様に現れていたのである。

このように、北米大陸滞在中に訪れたカナダについてトクヴィルの残した記述は、そのフランス観や政治思想のあり方を理解する上で、なかなか興味深いものを含んでいる。とりわけ昨今のトクヴィル論ではあまり触れられない彼の「ナショナリズム」を掘り下げていく場合、それは、彼のアルジェリア論などと合わせて、今一度見直されてもよいのではあるまいか。今後その種の課題がトクヴィル研究者の間で深められていくことを、筆者としては大いに期待したい。

¹ 以下、トクヴィル作品からの引用はすべて *Tocqueville, Œuvres* (Paris: Gallimard, 1991) に拠った。訳文はすべて筆者のものである。引用先については、丸括弧内にローマ数字にて本書の巻数、アラビア数字にて頁数を示しておいた。

シリーズ〈本を読む〉

武田尚子『チョコレートの世界史—近代ヨーロッパが磨き上げた褐色の宝石』
 (中央公論新社、2010年12月20日)
 CAPS 所員 (経済学部教授) 吉田 由寛

人類にとって初めてのチョコレートは、カカオの原産地メキシコで紀元前から存在していた飲みものだった。カカオ豆を挽くとドロドロのカカオマスになる。古代メキシコ人はこれを水に溶かし様々なスパイスを加えて飲んでた。それは甘くはなかった。チョコレートに砂糖が入って甘くなったのは16世紀にスペイン人がメキシコにやってきてからである。その甘い飲みものは17世紀にはヨーロッパへ広まっていった。ただ、カカオに多量に含まれるカカオバターが浮いている非常にくどい飲みものだったという。

19世紀になるとチョコレートはその進化のスピードを一気に速める。オランダのヴァン・ホーテンはカカオマスからカカオバターを脱脂する技術を開発し、これは現在の「ココア」の基礎となった。またイギリスのジョセフ・フライは邪魔だったココアバターをカカオマスに加えることで「食べるチョコレート」を発明した。さらにスイスではペーターとネスレがミルクチョコレートの製造に成功した。20世紀になると、イギリスのロウントリー社がキットカットを売り出し、チョコレートの近代的な工場生産と大々的な広告を駆使したマーケティングが始まる。その一方で、ベルギーではスイーツ職人が手作業で作るプラリヌ(チョコレートの中に詰め物をした一口サイズの菓子)が発達していった。

本書は、チョコレートがこのようにグローバル食品として成長してきた歴史を、特に貿易体制と生産・加工体制に着目しながら解き明かしたものである。都市社会学・地域社会学を専門とする本書の著者は、19世紀末から20世紀初頭のイギリスの貧困研究に関わる資料を紐解いていく中で、必然的にチョコレート探索の道に辿り着いていったという。当時イギリスの貧困問題・労働問題への取り組みに大きな影響を与えた研究者シーボム・ロウントリーは、何とキットカットを発売したロウントリー社の社長でもあったのだ。ロウントリーが、キットカットの赤いラッピング・ペーパーを戦争中は青に変更して、自社製品の消費者や自社工場の労働者へ向けて平和へのメッセージを発していたという記述はとても興味深い。

私は本書を読んでやりたくなったことがある。

古代メキシコで飲まれていたスパイス入りチョコレートドリンクの再現だ。必要な材料は本書だけでは不明だったのでインターネットで調べた。幸いなことに、自宅にはトウガラシをはじめ、以前メキシコで手に入れた様々な種類の香辛料があった。カカオマスは製菓食材の専門店ですに入れた。

はじめにカカオマスをぬるま湯に加えドロドロに溶かす。舐めると耐えられないほど渋く苦く、とても飲めるものではない。アステカ人やマヤ人がさまざまなスパイスを加えた理由は、まさにこの渋さ・苦さを抑えるためだ。そこで、アンチョとアバネーロという2種のトウガラシ、アチオテ、シナモン、バニラ、それにトウモロコシ粉を加えた。すると渋み・苦みが穏やかになり味に深みが出た。次にこれを温めることにした。古代メキシコ人は冷たいまま飲むことを好んでいたとされるが、一度加熱してトウモロコシ粉にとろみを出してまろやかにしたものを冷まして飲んでたのではないかと考えたからだ。

これで古代メキシコの味が再現できたと思うが、残念ながら好んで飲みたい味ではない。やはり甘さが足りないのだ。古代メキシコ人も蜂蜜を加えて甘く飲むこともあったというから、もし当時砂糖があれば彼らも入れていたに違いない。そう思い、砂糖を投入した。優しくて甘い普通のココアとは全く別の力強く刺激的で複雑な味の飲みものが出来上がった。この美味しさは、世界遺産に認定された現代メキシコ料理を代表する「モレ」(チョコレート・香辛料・ドライフルーツ・ナッツなどで作ったソースを鶏肉にかけた料理)を連想させた。



アジア太平洋研究センター (CAPS) 活動報告 (2012.12.16 ~ 2013.3.15)

公開講演会、研究会、研究出張などの記録

- ◇ 12月16日(日) センタープロジェクト海外出張(12月20日まで)
出張者: CAPS特別研究員・趙 貴花
調査地: 大韓民国
目的: ソウルにおける九老区のガリボン「同胞タウン」というコミュニティに関する調査のため
- ◇ 1月2日(水) 自発的貢献行動研究プロジェクト海外出張(1月7日まで)
出張者: 経済学部准教授・山本 晶
調査地: アメリカ合衆国
目的: Stanford大学の共同研究者との打合せのため
- ◇ 1月28日(月) センター主催連続講演会「統合と分裂の力学から見るアメリカー過去・現在・未来」第5回目開催、17:00-18:40
テーマ: ジェンダー・ダイナミックスとアメリカ社会ー政治と経済と高等教育
講演者: ニューヨーク州立大学バッファロー校名誉准教授、CAPS客員研究員・野崎 与志子
場所: 3号館102教室
出席者: 35名
- ◇ 2月8日(金) 日韓比較メディア研究プロジェクト研究会開催、18:30-20:30
テーマ: 韓国における新聞メディアの現状
講師: 朝鮮日報・呂 元柱
場所: 上智大学
出席者: 7名
- ◇ 2月18日(月) 日韓比較メディア研究プロジェクト国内出張(2月20日まで)
出張者: 文学部教授・奥野 昌弘
調査地: 九州国立博物館
目的: 研究プロジェクトにかかる調査のため
- ◇ 2月18日(月) 日韓比較メディア研究プロジェクト国内出張(2月20日まで)
出張者: 文学部教授・中江 桂子
調査地: 九州国立博物館
目的: 研究プロジェクトにかかる調査のため
- ◇ 2月19日(火) センタープロジェクト国内出張(2月22日まで)
出張者: CAPS特任研究員・高一
調査地: 沖縄県公文書館
目的: 米国務省史料の閲覧および収集のため
- ◇ 2月24日(日) 難民・強制移動民研究の新境地プロジェクト研究会開催、13:00-20:00
テーマ: 欧州の擁護制度他
講師: 文学部准教授・墓田 桂
場所: 10号館第二中会議室
出席者: 9名
- ◇ 2月25日(月) センタープロジェクト海外出張(2月28日まで)
出張者: CAPS特任研究員・高一
調査地: 大韓民国

目的: 韓国外交史料館での韓国外交文書閲覧・収集のため

- ◇ 3月14日(木) センタープロジェクト海外出張(4月1日まで)
出張者: CAPS主任研究員・愛甲 雄一
調査地: アメリカ合衆国
目的: 資料収集のため

2012年度所員会議・運営委員会開催の記録

4月17日(火)	第1回所員会議
4月27日(金)	第1回運営委員会
5月10日(木)	第2回所員会議
6月1日(金)	第2回運営委員会
6月8日(金)	臨時所員会議(メール会議)
6月8日(金)	臨時運営委員会(メール会議)
6月15日(金)	臨時運営委員会(メール会議)
6月19日(火)	臨時所員会議(メール会議)
6月19日(火)	臨時運営委員会(メール会議)
7月12日(木)	第3回所員会議
7月26日(木)	第3回運営委員会
10月11日(木)	第4回所員会議
10月12日(金)	第4回運営委員会
1月10日(木)	第5回所員会議
1月25日(金)	第5回運営委員会

2013年度研究センター構成メンバー

所長・運営委員長	中神 康博(経済学部教授)
運営委員	成道 秀雄(経済学部教授)
	弓削 康平(理工学部教授)
	高田 昭彦(文学部教授)
	李 静和(法学部教授)
所員	田口 誠(経済学部教授)
	鈴木 誠一(理工学部准教授)
	中野 由美子(文学部准教授)
	塩澤 一洋(法学部教授)
主任研究員	愛甲 雄一
特別研究員	趙 貴花
客員研究員	井口 博充、上原 史子、高一、野崎 与志子、日野 俊彦、藤井 美保子、増田 篤
課長	神田 昭子
主査	佐々木 大介
事務補佐	仁井田 恵美子

CAPS Newsletter No.118

2013年4月15日発行

編集発行: 成蹊大学アジア太平洋研究センター
〒180-8633 武蔵野市吉祥寺北町3-3-1

☎ 0422-37-3549 (ダイヤルイン)

FAX 0422-37-3866

E-mail: caps@jim.seikei.ac.jp

Web: http://www.seikei.ac.jp/university/caps/